

私の 経営哲学

132

日本省力機械 社長

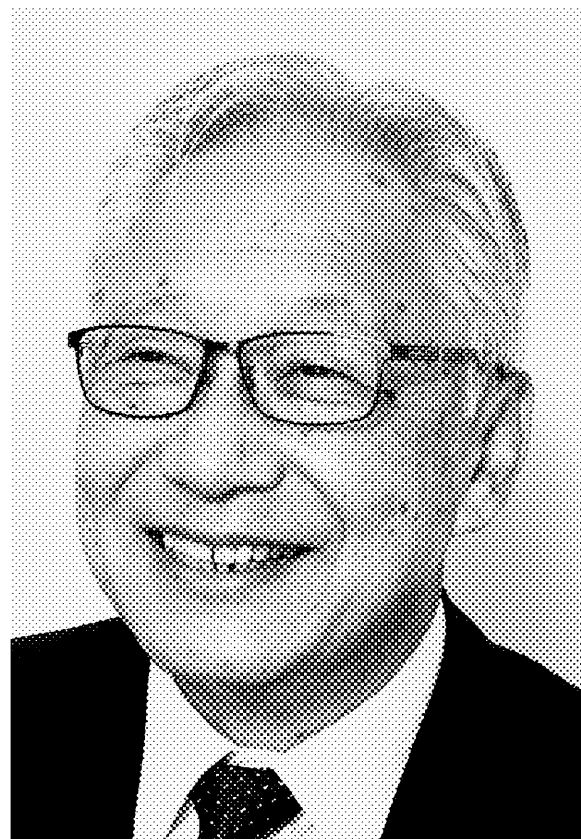
辰村 周平 氏

多くの社員は20歳から65歳くらいまでの人生で、一番元気な時期のたいてい朝9時から夕方5時を会社で過ごす。「仕事が楽しくなければ人生の一番おいしい時がつまらなくなる」とコンベヤーメーカーの日本省力機械（大阪府茨木市）の辰村周平社長は考える。「自分を生かす、高めるために社員も経営者も努力する必要がある」と辰村社長は強調する。

小学生から大学生はたいいてい100点満点の試験を時々受ける。これに対して社会人は「毎日試験で、ビジネスでは100点もあり得る」と捉える。1000点のアイデアを生かすには価格ではなく価値で競争する環境を築く必要がある。辰村社長は1日1時間程度一人で執務室に籠もって今後の戦略などを練る。「自らアイデアが浮かぶ方」だと自信を持つ。それでも「共感する人と一緒に仕事をしたい」と言う。共感する人が自分のアイデア以上のものを生み出す可能性があるためだ。

これらの考えの柱はソニー創業者の一人である盛田昭夫氏の著書『メイド・イン・ジャパン』を愛読して養った。小学生の時に父で日本省力機械創業者の辰村辰男氏がソニーのテープレコーダーを買ってくれた。「自分の声が残るのに感激した」と当時を振り返る。日本のメーカー

人生の「おいしい時」楽しく



人と出会い失敗恐れず挑戦

たつむら・しゅうへい 73年（昭48）立命館大工卒、同年日本省力機械入社。87年技術部長、88年取締役、90年専務、94年社長。大阪府出身、73歳。

は「よいモノを作るという印象がモノづくりを自指すきっかけになった。」

コンベヤーは成熟産業とされ、従来、価格競争が激しく「どう安く作るか考えてきた」と辰村社長は説明する。国連の持続可能な開発目標（SDGs）対応での省エネルギー化などでコンベヤーの稼働状況の見える化などの需要があると見込み、スマート化した機種を開発している。「社会の要求が変わり、ビジネスも変わる。先頭に立ってやりたい」と強調する。

コンベヤーを製作するのはメーカーだが「育ての親はユーザー」として、ユーザーによってさまざまな使い方を生み出してもらおう考え。そのために多くの人と出会う機会を作るとともに、失敗を恐れずに積極的に挑戦する姿勢を示してきた。

それがコンベヤーに続く製品のタペストリーの事業展開につながった。部品で取引のあった機械商社がじゅうたんメーカーからの自動織機製作の紹介を受けた。住江織物がその自動織機を購入するなど高評価を受けたが、輸用品に押されて国内メーカーが低迷し、ならばとその織機で自らタペストリーの製作に乗り出した。

経営は「最後は勤が全て」。経験に裏付けられたデータをもちつつ、アナログで決断して挑戦し続ける。（大阪・市川哲寛）